

Title	小林秀雄「私小説論」再読
Sub Title	Hideo Kobayashi and Marxism in prewar Japan
Author	寺出, 道雄(Terade, Michio)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2006
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.99, No.2 (2006. 7) ,p.297(127)- 309(139)
JaLC DOI	10.14991/001.20060701-0127
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20060701-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

小林秀雄「私小説論」再読

寺 出 道 雄

1 はじめに

1920 年代の中葉から 30 年代の前半にかけて、「台風」⁽¹⁾のように日本の知識層を襲ったマルクス主義の影響は、もっとも明瞭には、マルクス主義文学運動——プロレタリア文学運動——を通じて与えられました。

このことは、今日、日本の近現代の思想の歴史の中で、マルクス主義が果たした役割を回顧しようとするときに、改めて注目されるべき点をしめしています。すなわち、マルクス主義文学が、1920 年代の中葉から 30 年代の前半にかけての文学界に与えた影響を明らかにすることは、日本の近現代の思想の歴史の中で、マルクス主義が果たした役割を明らかにすることそのものに大きく繋がるといえる点です。

ところで、マルクス主義文学が、1920 年代

の中葉から 30 年代の前半にかけての文学界に与えた影響を見直すという作業は、すでに 1930 年代において、ほぼ同時代的に始まっていました。1933（昭和 8）年の、いわゆる「佐野・鍋山の転向声明」以降、マルクス主義文学者たちの転向が相次ぎました。そのマルクス主義文学者たちの転向と、それに続く転向文学の出現とを受けて、早くもそうした見直しの作業は開始されていたのです。

そこで、本稿では、ほぼ同時代的にマルクス主義文学の意義を見直していく作業の代表の一つであったといえる、小林秀雄の「私小説論」（1935 年）での議論について検討していくことにします。

もちろん、この小林の批評は、マルクス主義文学論としての意味のみを持っているものではありません。それは、彼の小説論を、1930 年代中葉において「中仕切り」的に総括して表明した作品とみなせます。しかし、本稿で

(1) 丸山真男「近代日本の思想と文学」『日本の思想』岩波新書、1961 年、p.74。

は、そのマルクス主義文学論としての側面のみに焦点をあてて、それを読むことにします。

以下、2では、まず、前提として、「私小説論」における小林のマルクス主義文学論を整理します。そして、そこでの整理を受けて、3では、小林のマルクス主義文学論に、一つの解釈ないし読みを加えます。その上で、4では、小林のマルクス主義文学論の特質をごく簡単に性格づけます。そうした作業によって、先に述べたように、日本の近現代の思想の歴史の中で、マルクス主義が果たした役割の解明へ接近する手掛かりが得られるだろうからです。

2 「私小説論」の概要

その文壇的な処女作である「様々なる意匠」(1929年)以来、小林秀雄は、マルクス主義文学のもっとも徹底した批判者でした。

そうした小林は、むしろマルクス主義文学運動が最盛明を越えたころから、マルクス主義文学の積極的な意義を公言するようになりました。小林のマルクス主義文学評価は、「私小説について」(1933年)、「文学界の混乱」(1934年)、「私小説論」(1935年)、「文芸批評の行方」(1937年)等でおこなわれていきます。その議論の骨子は、すでに「私小説について」における、以下の叙述に示めされていたといえます。

「プロレタリア文学運動が、わが国の私小説の伝統を勇敢にたたき切つたといふことは、

実際の作品のいい悪いは別としても、大きな功績であつた。⁽²⁾」

こうした、小林のマルクス主義文学評価を本格的に述べたものが、もはやマルクス主義文学運動の崩壊がはっきりとしていたもとで書かれた、「私小説論」でした。

しかし、「私小説論」の叙述は、小林らしい曲折にとんだものです。そこで、この節では、彼の議論の検討のための準備として、そこでのマルクス主義文学論を、論述の順序を適宜変更して、しかし、彼の真意を損なわないように注意しながら、都合6項目に分けてごく簡単に整理してみます。

i) 「封建主義的文学」である日本の自然主義文学

マルクス主義文学について述べるにあたって、小林は、明治後期以降において、日本の私小説の伝統の中軸をなしていった自然主義文学を、「封建主義的文学」と規定します。

「わが国の自然主義小説はブルジョア文学といふより封建主義的文学であり、西洋の自然主義文学の一流品が、その限界に時代性を持つてみたに反して、わが国の私小説の傑作は個人の明瞭な顔立ちを示してゐる。⁽³⁾」

その場合、日本の自然主義文学を「封建主義的文学」と規定しうるのは、自然主義の作家たちが、自己と社会とが、矛盾なく連続していると考えていたから、言い換えれば自己と社会との対立を自覚していなかったからです。

(2) 小林秀雄「私小説について」『新訂 小林秀雄全集』第三巻、新潮社、1933/78年、p.47。

(3) 小林秀雄「私小説論」『新訂 小林秀雄全集』第三巻、新潮社、1935/78年、p.132。

「わが国の私小説家達が、私を信じ私生活を信じて何んの不安も感じなかつたのは、私の世界がそのまま社会の姿だつたのであつて、私の封建的残滓と社会の封建的残滓の微妙な一致の上に私小説は爛熟して行つたのである。」⁽⁴⁾

ii) 西欧の「私小説」との差異

もちろん、西欧でも、自然主義文学の爛熟期以降にも「私小説」は存在しました。しかし、それらは日本の私小説とは性格を異にしていました。

「フランスでも自然主義小説が爛熟期に達した時に、私小説の運動があらはれた。……彼等が各自遂にいかなる頂に達したとしても、その創作の動因には、同じ憧憬、つまり十九世紀自然主義思想の重圧の為に形式化した人間性を再建しようとする焦燥があつた。彼らがこの仕事の為に、『私』を研究して誤らなかつたのは、彼らの『私』がその時既に十分に社会化した『私』であつたからである。」⁽⁵⁾

西欧においては、「私小説の主人公等がどの様に己れの実生活的意義を疑つてゐるにせよ、作者等の頭には個人と自然や社会との確然たる対決が存したのである。」⁽⁶⁾

iii) 「技法」としての自然主義の導入

これに対して、日本の自然主義作家たちは、

思想を技法のうちに解消していくことで、西欧の自然主義を受容しました。

「わが国の作家達は、西洋作家等の技法に現れてゐる限りの、個別化された思想を、成る程悉く受入れたには違ひなかつたが、これらの思想は作家めいめいの夢を育てたに過ぎなかつた。外来思想は作家達に技法的にのみ受け入れられ、技法的にのみ生きざるを得なかつた。」⁽⁷⁾

「以来小説は、作者の実生活に膠着し、人物の配置に、性格のニュアンスに、驚くべき技法の発達をみせた。」⁽⁸⁾

iv) 背景にあるブルジョア社会の狭隘性

こうした、自然主義の導入の特質が生じたのは、その背後に、日本における近代ブルジョア社会の狭隘性という事情が存在したからです。

「わが国の自然主義文学の運動が、遂に独特な私小説を育て上げるに至つたのは、無論日本人の気質といふ様な主観的原因にのみあるのではない。何を置いても先ず西欧に私小説が生れた外的事情がわが国になかつたことによる。自然主義文学は輸入されたが、この文学の背景たる実証主義思想を育てるためには、わが国の近代市民社会は狭隘であつたのみならず、要らない古い肥料が多すぎたのである。」⁽⁹⁾

(4) 同上, p.134。

(5) 同上, pp.121-122。

(6) 同上, p.122。

(7) 同上, p.124。

(8) 同上, p.125。

(9) 同上, p.122。なお、ここで、引用文中の「近代市民社会」という語は、戦後的な「市民社会」概念

「彼等〔日本の自然主義作家たち——引用者〕は西欧の思想を育てる十分な社会条件を持つてゐなかつたが、その代り……長く強い文学の伝統は持つてゐた。⁽¹⁰⁾」

そうした、長く強い文学の伝統のもとで、「完成された審美眼に生きてゐる作家らにとつて、新しい思想を技法のうちに解消することより楽しい事はない。又自然な事はない。⁽¹¹⁾」

v) 「思想」としてのマルクス主義の導入

こうした、思想を技法として導入するという近代日本文学の伝統の中で、技法に解消しえない思想として、マルクス主義が導入されることになりました。

「マルクス主義文学が輸入されるに至つて、作家等の日常生活に対する反抗ははじめて決定的なものとなつた。輸入されたものは文学的技法ではなく、社会的思想であつたといふ事は、言つて見れば当り前の事の様だが、作家の個人的技法のうちに解消し難い絶対的な普遍的な姿で、思想といふものが文壇に輸入されたといふ事は、わが国近代小説が遭遇した新事件だつたのであつて、この事件の新しさといふことを置いて、つづいて起つた文学界の混乱を説明し難いのである。⁽¹²⁾」

このように、マルクス主義は、近代日本文学が初めて経験した、「絶対的な普遍的な」思

想でした。

「思想が各作家の独特な解釈を許さぬ絶対的な相を帯びてゐた時、そして実はこれこそ社会化した思想の本来の姿なのだが、新興文学者等はその斬新な姿に酔はざるを得なかつた。当然批評の活動は作品を凌いで、創作指導の座に坐つた。この時ほど作家達が思想に頼り、理論を信じて制作しようと努めたことは無かつたが、亦この時ほど作家達が己れの肉体を無視した事もなかつた。彼らは、……内面化したり肉体化したりするにはあんまり非情に過ぎる思想の姿に酔つたのであつて、この陶酔のなかつたところにこの文学運動の意義があつた筈はない。⁽¹³⁾」

そして、マルクス主義は、そうした思想の「絶対的な相」がもたらす「公式主義」において、歴史的な役割を果たしたのです。

「併しここにどうしても忘れてはならない事がある。逆説的に聞こえようと、これは本当の事だと僕は思つてゐるが、それは彼等は自ら非難するに至つた、その公式主義によつてこそ生きてのたといふ事だ。理論は本来公式的なものである、思想は普遍的な性格を持つてゐない時、社会に勢力を勝ち得る事はできないのである。この性格を信じたからこそ彼等は生きてのた。この本来の性格を持つた思想といふわが文壇空前の輸入品を一手に引受

とは区別するために、「ブルジョア社会」と読んでおきます。

(10) 同上, pp.122-123。

(11) 同上, p.123。

(12) 同上, p.130。

(13) 同上, p.130。

けて、彼らの得たところはまことに貴重であつて、これも公式主義がどうのかうのといふ様な詰らぬ問題ではないのである。⁽¹⁴⁾」

vi) マルクス主義文学の役割と制約

こうした、「絶対的な相」を帯びた思想であるというマルクス主義の性格は、マルクス主義文学の歴史的な役割と制約とを決定しました。

「マルクス主義の思想が作家各自の技法に解消し難い絶対性を帯びてみたことは、プロレタリア文学に於いて無用な技巧の遊戯を不可能にしたが、この遊戯の禁止は作家の技法を貧しくした。……だが、又この技法の貧しさのうちに私小説の伝統は決定的に死んだのである。⁽¹⁵⁾」

「成る程彼らの作品には、後世に残る様な傑作は一つもなかつたかも知れない、又彼等の小説に多く登場したものは架空的人間の群だつたかも知れない。併しこれは思想によつて歪曲され、理論によつて誇張された結果であつて、決して個人的趣味による失敗乃至は成功の結果ではないのであつた。⁽¹⁶⁾」

そして、そうしたマルクス主義文学の歴史的な役割と制約とは、マルクス主義文学者たちの相次ぐ転向によつて生れた、転向文学の作家たちにとっての文学的な課題をも示唆しています。

「最近の転向問題によつて、作家がどういふものを齎すか、それはまだ言ふべき事ではないだらう。ただ確実なことは、彼等が自分たちの資質が、文学的実現にあつて、嘗て信奉した非情な思想にどういふ具合に堪へるかを究明する時が来た事だ。彼等に新しい自我の問題が起つて来た事だ。さういふ時彼等は自分のなかにまだ征服し切れない『私』がある事を疑はないであらうか。⁽¹⁷⁾」

3 「私小説論」の解釈

1 さて、この節では、以上で整理した小林秀雄の「私小説論」でのマルクス主義文学論に、一つの解釈ないし読みを加えます。

その場合、まず、ふれておかなければならないことがあります。それは、小林のマルクス主義文学論と中村光夫のそれとの関連についてです。

中村は、大学生時代に左派系の同人雑誌に拠つて、マルクス主義的な観点による批評や小説を発表していました。一方、彼は、旧制高校の生徒であつたとき以来、小林に親炙していました。そうした中村は、1934（昭和9）年頃、マルクス主義から離脱し、35（昭和10）年には、いくつかのマルクス主義文学論や私小説論を発表しました。⁽¹⁸⁾ところが、そこにお

(14) 同上, pp.131-132。

(15) 同上, pp.144-145。

(16) 同上, p.132。

(17) 同上, p.145。

(18) 中村光夫「転向作家論」,「プロレタリア文学運動——その文学史的意義」,「私小説について」『中村光夫全集』第七巻, 筑摩書房, 1935/72年。

ける中村のマルクス主義文学の文学史的な意義についての理解は、内容的に、小林のそれに極めてよく類似しているのです。

そのことから、かつて平野謙は、「小林秀雄の私小説論と中村光夫のプロレタリア文学史論とは、そこに強力な相互浸透のあったことは疑いないとしても、その主導性は若き中村光夫の手に握られていたのではないか」という⁽¹⁹⁾想定を述べました。これに対して、江藤淳が、⁽²⁰⁾「この仮説は成立しがたい」と応じたのです。

この平野と江藤の論議については、詳しくは述べません。しかし、小林と中村の批評——中村の関連の論考の一部は、小林の「私小説論」の雑誌連載（1935年5月～8月）に先立って発表されており、その一部は、雑誌連載終了後に発表されています——を読み比べてみると、「その主導性は若き中村光夫の手に握られていた」とまで断定することは無理でも、その両者のマルクス主義文学論に「相互浸透」があったことそのものは間違いないように思われます。

江藤に一蹴された平野の仮説の弱さは、「小林秀雄の私小説論と中村光夫のプロレタリア文学史論」を照応させようとしたことにあったのです。小林の私小説論の原型が、前節でふれた「私小説について」（1933年）にあった

ことは明らかです。そして、平野は、先の仮説を述べたときに、「私小説について」を読み落としていたのです。江藤の平野批判は、その読み落としを突いたものでした。しかし、小林の「私小説論」（1935年）全体の出自を問うのではなく、それに含まれた「プロレタリア文学史論」を問題とすれば、小林→中村という影響関係のみでなく、中村→小林という影響関係が存在したことは疑いないといえます。⁽²¹⁾

しかし、ここでは、小林の議論を小林の議論として扱い、小林と中村の議論の関連そのものについてはふれません。

以下、そうした前提のもとで、小林の議論を扱います。

2 小林は、日本における自然主義文学、あるいは自然主義に発する自然主義以降の私小説を、「封建主義的文学」と規定しました。すなわち、西欧の近代作家の「頭には個人と自然や社会との確然たる対決が存した」のに対して、日本における自然主義作家たちには、個人と社会との対立の自覚が存在していなかったことから、そうした規定が生れたのです。

西欧において、個人と社会との対立の自覚が、近代ブルジョア社会において確立され、その個人と社会との対立の自覚が、「ブルジョア

(19) 平野謙「文学・昭和十年前後」『平野謙全集』第四巻、新潮社、1975年、p.291。

(20) 江藤淳「小林秀雄」『江藤淳著作集』第三巻、講談社、1967年、p.92。

なお、平野・江藤の論議は、両者の著書の原型が雑誌連載中であった1960（昭和35）年におこなわれました。

(21) もっとも、平野・江藤の論議の後に書かれた中村自身の回想（中村光夫「今はむかし——ある文学的回想」『中村光夫全集』第一四巻、筑摩書房、1970/73年。）からも、その点に関する確証は得られません。

文学」の前提となっていたとするなら、そうした自覚を欠いた日本における自然主義文学は、「ブルジョア文学」にまで到達していない「封建主義的文学」と規定するしかない、というのが、小林の理路であったと考えられます。

もちろん、その場合、今日の眼から見て、日本における自然主義文学を「封建主義的文学」と規定することが適切であるかどうかは、問題であるでしょう。しかし、日本における自然主義文学を「封建主義的文学」と規定する小林の理解には、注目しなければならない点が含まれています。

日本の自然主義文学を「封建主義的文学」と規定する小林の理解は、少なくとも最盛期におけるマルクス主義文学者たちの理解とは異なっていました。

彼等は、自らの文学を「プロレタリア文学」と称したことにしめされるように、既存の「ブルジョア文学」と対抗しようとしていました。そうした彼らの立場からするなら、日本の自然主義文学が、「ブルジョア文学」あるいは「小ブルジョア文学」と規定されることは明らかです。⁽²²⁾

日本において、封建的な要素を社会の性格規定に用いる理解が影響力を持ちだしたのは、1932（昭和7）年に、当時のコミンテルンが、「日本における情勢と日本共産党の任務にかんするテーゼ」（いわゆる「32年テーゼ」）を發表し、その前後（1932年～33年）に、日本の

マルクス主義者たちが『日本資本主義発達史講座』を刊行してからのことです。とりわけ、「32年テーゼ」の發表と『発達史講座』の刊行を受けて、34（昭和9）年頃から、日本資本主義論争が、日本のマルクス主義者たちの間でたたかわされるようになってから、そうした理解は強い影響力をせめしました。

「私小説論」が發表された1935（昭和10）年には、日本資本主義論争は、総合雑誌や一般の新聞を主要な舞台として、もっとも盛んにおこなわれていました。封建的ないし半封建的な要素を、日本社会の性格規定に用いたのは、その論争における、「講座派」と呼ばれる、コミニズム系のマルクス主義者たち——小林が、プロレタリア文学運動というときに主に意識していた、かつての「日本プロレタリア作家同盟」（略称：ナルプ。1934年2月に解散。）と思想的には同系の集団——でした。

小林の、自然主義文学を「封建主義的文学」と規定する理解は、マルクス主義文学運動の最盛期、すなわち、1920年代の末から30年代の初頭に形成されたものではなく、日本資本主義論争が高揚していた、30年代の中葉に形成されたものであったと考えることができます。

「私小説論」において、そうした時代背景のもとで、西欧の近代文学と日本の近代文学——あるいは、小林流に考えれば、カッコ付きの「近代文学」——との性格の差異が、「ブルジョ

(22) 事実、たとえば、蔵原惟人はそのように規定（蔵原惟人「プロレタリア・リアリズムへの道」『芸術論』中央公論社、1928/32年。）しています。

ア文学」と「封建主義的文学」という、文学の性格の歴史的な段階規定の差異として表現されたことは、興味深いことです。

そうした、西欧と日本の近代文学の性格の差異を、歴史的な段階規定の差異として捉える把握といい、日本の近代文学——自然主義文学——の特異性、すなわち、思想の特質を、日本における「近代市民社会」の「狭隘」さに、すなわち、社会構造の特質に、全面的にはないにせよ、還元して捉える把握といい、本来はマルクス主義によってもたらされた思考方法を、この時代の小林が当然のように採っていたことは、彼自身の表現を借りれば、「言つて見れば当り前の事の様だが」、一つの事件だったといえるのです。

反マルクス主義者である小林にも、マルクス主義的といえる思考方法が浸透していたもとので、「私小説論」におけるマルクス主義文学論は書かれたのです。そこにおけるマルクス主義文学評価が、単純な否定に終わらなかったことは、むしろ当然でした。

3 「私小説論」におけるマルクス主義文学論のキーワードとして、ここでは、「公式主義」という言葉を取り上げてみましょう。小林は、マルクス主義文学者たちは、「その公式主義によつてこそ生きたのだ」としました。

マルクス主義の思想としての特質は、内容的には、それが統一的世界観であること、すなわち、全領域性に、機能的には、それが人を実践にいざなう世界観であること、すなわち、全人格性に、求めることができます。

ところが、マルクス主義が集団の思想とされたとき、内容的な全領域性は、骨化して《公

式主義》に、機能的な全人格性は、骨化して《政治主義》に転じていきました。ここで、《公式主義》とは、その教義によってさまざまな現実を直ちに裁断するという認識上の態度であり、《政治主義》とは、集団の政治的教義に個人の思想の営みを服させるという実践上の態度です。

その場合、小林が用いた公式主義という言葉は、以上における《公式主義》の意味とともに《政治主義》の意味をも含んでいたと解釈できます。そこで、以下では、公式主義という言葉を用いて、以上での《公式主義》の意味とともに《政治主義》の意味をも含んだものとして用います。

さて、ある思想が長所と短所とをもち、その思想にもとづく文学運動が成功と究極の失敗とを経験したとすると、そうした成功を思想の長所と、究極の失敗を思想の短所と結びつけて解釈することは自然です。そうすると、マルクス主義文学運動の場合には、その思想の全領域性と全人格性が成功をもたらしたが、それらが公式主義に転じていったことが、究極の失敗をもたらしたのであるという解釈が生れることとなります。

確かに、公式主義が、マルクス主義文学運動の究極の失敗をもたらしたことは間違いありません。しかし、小林によれば、まさに、「社会化した思想の本来の姿」である「各作家の独特な解釈を許さぬ絶対的な相」がもたらす公式主義こそが、マルクス主義文学運動の成功をももたらしたのです。

「プロレタリア文学」は、1920年代の末から30年代の初頭にかけて、「ブルジョア文学」

ないし「封建主義的文学」を圧倒して、日本の文学界を席捲しました。⁽²³⁾小林は、そうした事態がもたらしたものを、「文学界の混乱」と呼びました。

その「文学界の混乱」について、小林は、マルクス主義の全領域性と全人格性が、文学者たちの高いアスピレーションによって、公式主義にまで昂られていったことが、マルクス主義文学運動に、既存の日本の文学界の思想的な状況を根底から覆すという役割、作家たちの「日常生活に対する反抗」を初めて決定的にもたらすことによって、根強い「私小説の伝統」を「決定的に死」なせるという役割を果たさせたのでありとしました。彼は、そうした、公式主義の中に、マルクス主義文学運動が現実を持ち得た、強い凝集力と衝撃力の秘密を見たのです。

そこでは、小林は、「独特な解釈を許さぬ絶対的な相」をしめすことが、「社会化した思想の本来の姿」であり、その思想の絶対的な相は、現実の中では、公式主義に帰結していくものと捉えていたこととなります。そのことは、彼が、思想が個人思想であることを超えて、「社会化した思想」とされるなら、その思想は、それ自身が一つの客観的な実在と化して、それを抱懐した個人を、逆に、包摂し拘束していくようなメカニズムが形成されていくと認識していたことを意味します。彼は、同時代の観察者として、マルクス主義文学運

動を通じて、「社会化した思想」が、それを抱懐した個人に対して振るう大きな力を実感していたのです。

小林は、マルクス主義文学運動の特質を、理論による創作指導に、すなわち、文学理論の文学創作に対する圧倒的な優位に見いだしました。彼は、技法には解消しえない、絶対的な相を帯びた思想としてのマルクス主義という、「わが文壇空前の輸入品」による創作指導の内に、一つの客観的な実在と化した思想による個人の包摂と拘束の、顕著で具体的な現われを見たのです。

ところで、小林は、マルクス主義を、「内面化したり肉体化したりするにはあんまり非情に過ぎる思想」と表現しました。内面化できない思想を、はたして思想と呼べるかどうかを問えば、この表現に、彼のマルクス主義、ないしマルクス主義者への批判がこめられていたことは明らかです。

小林が、マルクス主義を、内面化するのには「非情に過ぎる」思想、あるいは各作家による「独特な解釈を許さぬ」思想と呼んだとき、彼は、その背後に、マルクス主義の社会や歴史についての把握における、決定論的な性格を想定していたのであると思われます。そうした、マルクス主義の決定論的な性格は、「社会化した思想」が、それを抱懐した者の内面を、逆に、包摂し拘束していくメカニズムを、より強固なものとしていきます。

(23) マルクス主義文学運動による文学界の制覇から、その崩壊にいたるまでの経過については、下記を参照。

栗原幸夫『プロレタリア文学とその時代』インパクト出版会、2004年。

4 さて、マルクス主義文学の特質は、「私小説論」の後に小林が用いた表現では、「文学の蒙る社会的制約性⁽²⁴⁾」の認識のもとに、「文学作品の社会的等価関係⁽²⁵⁾」すなわち、文学作品の社会的・政治的機能——具体的には文学作品の革命や反戦のメッセージとしての機能——を純化させようと試みたことです。マルクス主義文学運動は、そうした文学作品の社会的・政治的機能の純化を、集団的に追及しようとしていました。

マルクス主義文学運動の内部での、もっとも重要な論争の焦点は、文学作品の機能と文学作品の価値の評価のあり方をめぐる問題におかれました。その論争の中で、文学作品の価値を、社会的・政治的価値に純化して捉える議論が、マルクス主義文学運動の正統的な立場とされていったのです。⁽²⁶⁾

そうした、決定論的な社会や歴史の把握から演繹された、文学作品の社会的・政治的機能の純化と、文学作品の価値の社会的・政治的価値への純化とを主張する文学理論による創作指導が、マルクス主義文学運動における公式主義の内実であったということが出来ます。

そして、そのような公式主義が支配する状況のもとで、——「彼らの作品には、後世に残る様な傑作は一つもなかつたかも知れない」とまでいえるかどうかは別として——マルク

ス主義作家たちの作品の多くは、画一化されたものとなりました。

そうした帰結を知っている眼には、文学作品を、社会的・政治的機能を果たすものとして純化し、文学作品の価値を、社会的・政治的価値に純化する試みそのものが、単純で粗野な試みに見えます。しかし、そのような試みが単純で粗野な試みに見えるのは、そう見る今日の眼が、すでにその試みの究極の失敗という帰結を知っているからに他なりません。

文学作品を、社会的・政治的機能を果たすものとして純化し、文学作品の価値を、社会的・政治的価値に純化するという試みが、初めて日本に現われたときの新鮮な衝撃を想像してみるべきでしょう。

その点についていえば、小林は、そうした文学理論にもとづく公式主義の中に、当時の新興文学者であったマルクス主義文学者たちの、思想への強烈な「陶醉」を見いだしました。ここでの「陶醉」という表現は、「私小説論」の後に用いられた表現を使えば、「観念性、思想性の驚くべき焦燥⁽²⁷⁾」と呼ぶことも出来ます。それらの表現には、マルクス主義文学運動によって、思想が実生活を乗り越えていく極限の姿を目撃したことへの、彼の驚きがしめされているといえるでしょう。そして、彼は、事もなげに、マルクス主義文学者は、「そ

(24) 小林秀雄「芸芸批評の行方」『新訂 小林秀雄全集』第三巻、新潮社、1937/78年、p.170。

(25) 同上、p.171。

(26) 小林は、「私は蔵原氏の議論を読んだ事がない」（小林前掲「私小説について」p.46。）としています。しかし、彼の理解した「プロレタリア文学」とは、ナルプの系列の中でも、「政治の優位性」論に帰結していった、蔵原惟人に主導された立場のことでした。

(27) 小林前掲「芸芸批評の行方」p.170。

の公式主義によつてこそ生きたのだ」と断言します。

小林は、マルクス主義作家たちが、公式主義によつて自らこうむることになった、自己否定ないし自己圧殺⁽²⁸⁾にともなう苦痛や苦悩には、一切の同情をしめしません。彼は、マルクス主義作家たちの間で生れた公式主義を非難する議論、「公式主義がどうのかうのといふ」議論を、「詰らぬ問題」と一蹴します。

小林にとって、マルクス主義作家たちの作品が、「思想によつて歪曲され、理論によつて誇張された結果」として、「架空の人間の群」を描き出すことになったかもしれないと評価することは、マルクス主義文学運動が、そうした公式主義のしめす強い凝集力と衝撃力によつて、文学界の思想的な状況を根底から改変していったことを高く評価することと、矛盾するものではなかったのです。

こうして、マルクス主義文学運動の歴史的な役割に対する、高い文学史的な評価が、マルクス主義作家たちの作品に対する、文字通りに非情な評価とともに生みだされることになったのです⁽²⁹⁾。

こうした小林の理解は、マルクス主義文学運動が経験した事実の認識として、同時代の観察のみが持ち得る確かさを持っていたといえます。そして、その確かさは、彼がマルクス主義文学の徹底した批判者であったことに

よる、観察の外在性によつてもたらされたものでした。

5 以上で見てきた小林の議論を、個人と社会との関係という枠組みを用いて、整理し敷衍してみましょう。

自然主義以来の、日本の私小説作家たちは、たとえ、彼らが実生活の中でいかに苦痛や苦悩を感じ、彼らの苦痛や苦悩を作品として表出しようと、そのあくまでも個人的な苦痛や苦悩が、社会の中の読者の苦痛や苦悩と直ちに同型であると前提し得た限りにおいて、個人と社会との無意識的な調和の内にまどろんでいたのだということが出来ます。これに対して、マルクス主義文学者たちは、個人と社会との対立の強烈な意識をもたらしました。しかし、そのとき、彼らの内面では、個人はあるべき社会のための思想に呑みこまれていきました。あるべき社会のための思想に個人が呑みこまれていったからこそ、個人と対立する社会の相貌の鮮烈な発見が可能とされたのです。

そして、その個人と社会との対立の発見は不可逆性を帯びたものでした。ここでは、中村光夫の表現を借りれば、マルクス主義文学運動を経過することによつて、「自分の苦痛を素朴にいたはりその舐めり尽した味はひを芸もなく披瀝し、世帯の苦勞がそのまま作家修行なりとする伝統は、……文学の主流からは

(28) この点については、下記を参照。

拙稿「転向文学の時代——高見順の場合を中心に」『三田学会雑誌』第98巻2号、2005年。

(29) 小林のマルクス主義文学に対する高い評価を、平野謙は「今日の文学常識からは買いかぶりと思えない」（平野前掲「文学・昭和十年前後」p.359.）としています。しかし、小林は、マルクス主義文学の作品を高く評価したわけではありません。

跡を絶つた⁽³⁰⁾」のです。

このように整理し敷衍するならば、小林にとって、マルクス主義文学運動を経験し終えた作家たちの課題は、マルクス主義文学運動において思想の中に呑みこまれていった個人に、公式主義に苦痛や苦悩を抱いた個人——小林のいう「まだ征服し切れない『私』」——を再発見して、その個人の再発見の上に、個人と社会との無意識的な調和でもなく、また、思想の中に呑みこまれていった個人と社会との対立でもない、個人と社会との対立ないし相克の姿の新たな認識の上に立った作品をもたらしていくという課題であることとなります。しかも、その課題は、「周囲にいよいよ心理や性格を紛失してゆく人達を眺めて⁽³¹⁾」、すなわち、急速に狭義の現代人と化していく人々の存在を見据えて、果たされなければならないのです。

小林は、そうした課題を、少なくとも、転向作家たちにとっての文学的な課題として提起したのです。

高いアスピレーションによって、思想が個人を呑みこんでいく公式主義をもたらしていったことこそが、マルクス主義文学運動の強い凝集力と衝撃力の秘密であった限り、マルクス主義文学そのものに公式主義の是正を求めることは無効です。個人と社会との対立の意識が、西欧におけるように「ブルジョア文学」に

よってではなく、「プロレタリア文学」によってもたらされた日本において、マルクス主義文学運動が提起した問題を超えて、「新しい自我」の発見によって、個人と社会との対立ないし相克の姿の新たな認識の上に立った作品を作りだしていくことは、マルクス主義文学運動の崩壊の後の作家たち、とりわけ自らがそれを経験した転向作家たちの文学的な課題となるのです⁽³²⁾。

「私小説論」の議論は、そうした転向作家たちへの文学的な課題の提起によって終わっていきます。

4 おわりに

「私小説論」における小林秀雄のマルクス主義文学論は、発表直後から、戦後の最初の四半世紀の頃まで、とりわけ、マルクス主義の影響を受けた文学者たちによってさまざまに解釈され、論評されてきました。

その場合、「私小説論」を以上のように読んでくると、それは、1920年代の末から30年代の初頭にかけて、マルクス主義が文学界を席捲していた状況が、マルクス主義文学運動の崩壊によって解消——いわゆる「文芸復興」——された後、日中戦争の開始によって、文学者たちの「日本への回帰」がはっきりしてくるまでの間、すなわち、1935・36（昭和10・

(30) 中村前掲「プロレタリア文学運動——その文学史的意義」p.72。

(31) 小林前掲「私小説論」p.145。

(32) そうした小林がしめた課題の含意を理解するためには、「私小説論」の頃の彼にとって、同時代的な小説の何よりの範例が、ジードの『贖金づくり』（1926年）であったことは、示唆的でしょう。「私小説論」の頃の彼は、しばしば『贖金づくり』について言及しています。

11) 年頃を中心として、リベラリズムの風潮が文学界を蔽った中で書かれたという性格を、濃厚にしめしているように思われます。

今日の眼からすれば、「私小説論」を書いた時点における小林の思考は、個人と社会との関係の捉え方においても、また、社会科学的な発想の強さにおいても、意外にも、戦後における近代主義の思考に近いところにあったといえます。そのことは、「私小説論」前後の小

林のマルクス主義論が、『日本の思想』（1961年）等における丸山真男のマルクス主義論に大きな影響を与えていったことにも、しめさ(33)れています。

もっとも、小林の思考は、日中戦争の開始後の戦時体制化の深まりの中で、大きく変化していくのですが。

（経済学部教授）

(33) なお、下記における小林秀雄論も、小林のマルクス主義論に関説した丸山の系譜による批評として重要です。

橋川文三『『社会化した私』をめぐって』、「転形期の自我」『増補 日本浪漫派批判序説』未来社、1958/63年。

* 本稿脱稿後、小林のマルクス主義文学論についての、本稿とは対照的な理解を含む以下が出版された。野村幸一郎『小林秀雄 美的モデルネの行方』和泉選書、2006年。

なお、本稿は続稿に続く。